トピックス

唯美主義者たちのテーブルで

Stephen Calloway and Lynn Federle Orr (eds.), *The Cult of Beauty: the Aesthetic Movement 1860–1900* (London: V&A, 2011)

橋本　順光

カントリーハウスをのぞくと、後期ヴィクトリア朝（風）と覚しい異様な一室に出くわすことがある。趣味を統一したつもりで異国の事物が場違いに並べ立てられ、装飾も簡素なのか過多なのかわからない。しかし、そこで主人が得意げにポーズをとり、客を案内したことだけはよくわかる。そんな一室である。2011 年、本書の元となった唯美主義展をヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で目にしたとき、同じ印象を抱いた。ロセッティの書斎を再現したのはいいとしても、ジャポニスム絵画の展示室では床に畳が印刷されており、黒が目立つ会場には雑誌や陶磁器に家具そして衣服までもが、所狭しと詰め込まれていたからだ。およそ唯美主義が独りよがりで雑多なことしかわからない。各様式を系統だてて保存し良き趣味を観客に教え込むことが、V&A 設立当初の目的だったはずだ。前身の装飾美術博物館は、反面教師として趣味の悪い「戦慄の間」(1852–3) を設けていたほどの場所である（詳細は菅靖子『イギリスの社会とデザイン』の第一章にあたられたい）。ゆかりの地で、まさか「戦慄の間」の再現でもあるまいと怪訝に思ったのだ。

しかし、この雑然さこそがねらいだったのかもしれない。当初、1860 年代では絵画や文学から始まった高踏的な唯美主義が、中産階級に広まることで社会運動ひいては社会現象へと拡散していった過程が如実に納得できたからである。実際、展覧会を監修したキャロウェイによれば、唯美主義「運動」においては「美」の内実を共有していたというよりも、「美」を道徳や規範よりも優先することで当時の慣習に異を唱えたことこそが重要だったという（p. 13)。なるほど展覧会の副題は「ヴィクトリア朝のアヴァンギャルド」だった。前衛という言葉は本書でもしばしば登場する

が、ヴィクトリアニズムへの反旗のもとに猛者たちが集まり、その最前線から百家争鳴が続いたということなのだろう。Lambourne の *The Aesthetic Movement* (1996) の二番煎じを避けようと、その衝撃と混乱に重点を置いたともいえる。雑然に見えるのは、中産階級の拡大と産業社会の進展が臨界に達し、新たな時代が到来しつつあってのことだったのだ。

それはまた現代的ということでもある。タイトルに Cult とあるが、これぞ美と信じ込んでいる人々はしばしば奇矯に写るものだ。異国の文物が文脈を無視して評価されていたとしても、貪欲に様式や趣味を改善していこうとする試みなのだから、いいたてるのは野暮かもしれない。装飾やデザイン自体の自律のために、旧来のキリスト教的伝統とは無縁な存在が必要だったということなのだろう。もちろん、それは試行錯誤にほかならず、自己陶酔が鼻につくと唯美主義運動がしばしば風刺されたのは本書でも触れられているとおりだ。なるほど本書にふんだんに盛り込まれた絵画、家具、宝石、服飾、壁紙の図版を眺めているだけでも、自分にとって美しいものを主張し、その享受を当然の権利と考える自己肯定が横溢していることに嫌でも気づかされる。しかし、規範や伝統から距離を置き、様式や文脈から自由に、とはいえ大量に生産された商品を選択する「自由」競争で良き趣味を求めるとは、現代まで続く営みではないか。となると、カントリーハウスの「戦慄の間」が気に障るのも、それが我々の姿とどこかしら重なるからなのだろうか。

ヴィクトリア朝研究が大きく進展し、深く掘り下げた個別研究が続く今、ここまで大きな枠組みで現代性をも射程に入れた総括は、いまや V&A くらいにしかできない力業かもしれない。ぱらぱら眺めていると隣席の人と共通の話題が見つかり、それを囲んで話が弾む本をコーヒーテーブルブックというが、本書はヴィクトリア朝研究者にとってそんな存在になるだろう。総花的でやや物足りない一方で、もはや個人では追いきれない後期ヴィクトリア朝の多様性が総覧され、意外なところで話がつながってくるからだ。最近の V&A 本体の充実ぶりもめざましく、常設展や解説ヴィデオの多くはウェブサイトでも閲覧できる。先の Lambourne の書籍、それに V&A での画期的な展覧会カタログ *The Victorian Vision* (2001) とあわせて紹介しておきたい。